Vol. XVI, No. 9

THE ASTRONOMICAL HERALD

September 1923

Published by the Astronomical Society of Japan

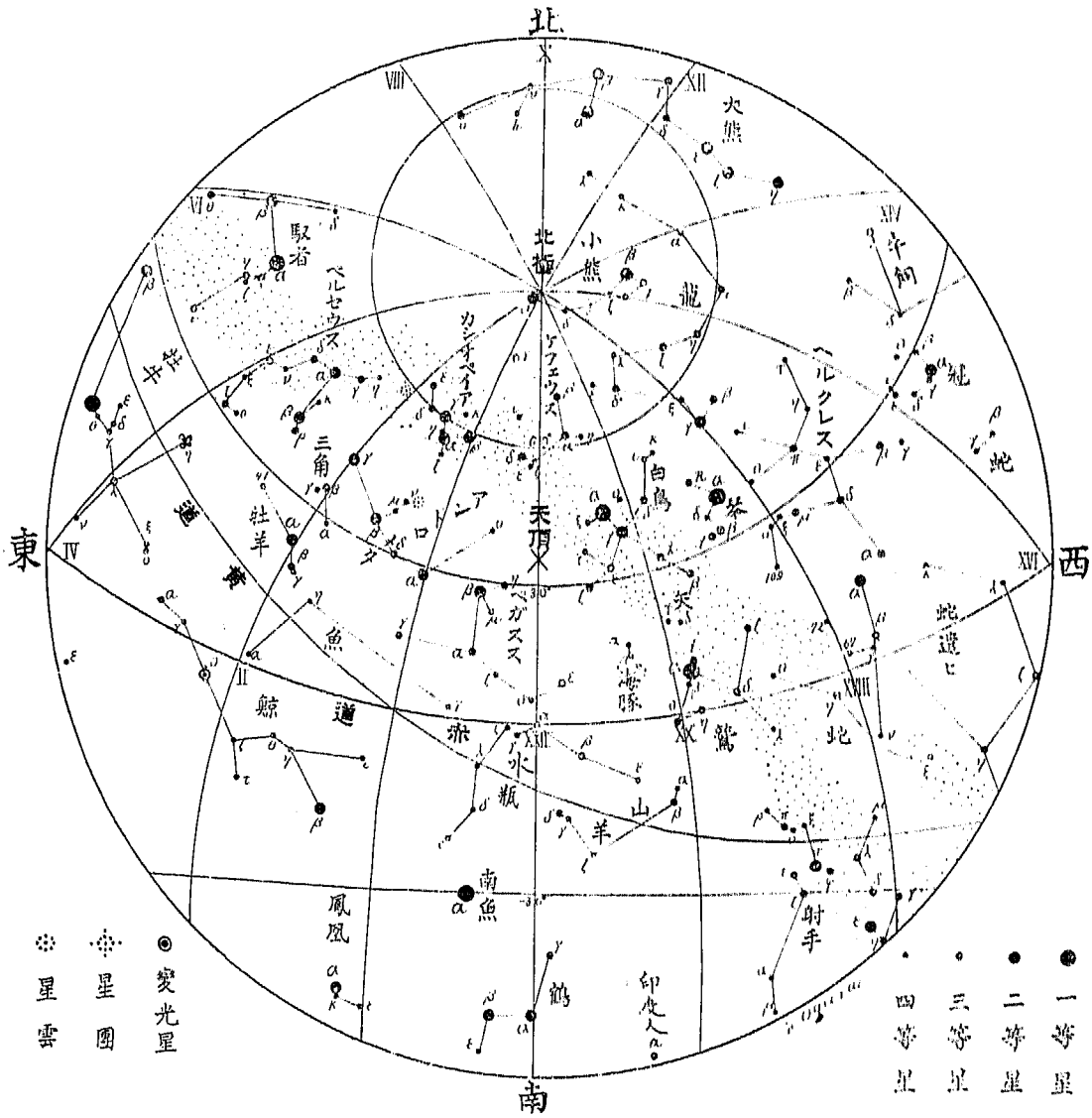
Whole Number 186

天文月報

大正十二年九月　第十六卷　第九號

明治四十一年三月三十日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
大正十二年九月十二日印刷納本　大正十二年九月十五日發行

一日午後九時　十月の天　十六日午後八時



Contents;—Eulogical Notes Concerning Late Prof. H. Terao,—by *Kyohei Nakamura, Kiyowo Nakamura, Shin Hirayama, Keisaburo Ashino, Hisashi Kimura, Kiyotugu Hirayama, Motaji Kunieda Tokuro Nakano,* —— The Face of Sky for October

Editor *Takahiko Matukuma* — Assistant Editors *K. Ogawa,* — *S. Kawai.*

目次

弔詞……日本天文學會……一三一
弔詞……東京天文臺長……一三一
履歷書(略)……一三二
故寺尾博士に就て……中村恭平……一三三
寺尾藤君は學才優秀の人……中村繕男……一三四
おもひで……平山信……一三四
寺尾先生を憶ふ中の一小節……廣野敬三郎……一三七
○……木村榮……一三七
寺尾先生の面影……平山清次……一三八
寺尾先生を憶ふ……國枝元治……一三九
寺尾先生に就て古き思出の一節……中野德郎……一四二

雜報

寺尾先生の御葬儀……一四三
關東大震災……一四三
編輯者より……一四三

十月の天象

天圖……一二九
惑星だより……一三〇
太陽、月、月食、流星群、變光星、星の掩蔽……一四五

十月の惑星だより

水星 曉天、乙女座中にあり、月始逆行するも七日午後九時留を經て順行となる、一一日午後八時近日点を通過す、一五日午前二時四分最大離隔一八度〇六分となる、三〇日曉土星と接近す、視直徑一〇—五秒

一日	赤經	一二時 六分	赤緯南	二度三八分
一六日	赤經	一二時一二分	赤緯北	〇度 二分

金星 宵天、乙女座中部より天秤座中部迄順行す、視直徑約一〇秒

一日	赤經	一二時四九分	赤緯南	四度〇一分
一六日	赤經	一三時五九分	赤緯南	一一度二〇分

火星 曉天、獅子座より乙女座迄順行するも觀望に適せず、視直徑約四秒

一日	赤經	一一時二三分	赤緯北	五度一四分
一六日	赤經	一一時五八分	赤緯北	一度二六分

木星 宵天、久しく宵の西天を賑はしたるも日沒後僅かに觀望し得るに過ぎず、天秤座中にありて順行、一二日午後八時二四分月と合をなし月の南四度二分にあり、視直徑三〇—二九秒

一日	赤經	一五時 五分	赤緯南	一六度三四分
一六日	赤經	一五時一七分	赤緯南	一七度二四分

土星 乙女座の中部にありて順行す、月始宵天にあるも一七日午後八時留を經て曉天に移る、視直徑約一四秒、環の傾斜約一三—一四度

一日	赤經	一三時二一分	赤緯南	六度 九分
一六日	赤經	一三時二八分	赤緯南	六度四九分

天王星 水瓶座北東部にありて逆行す、二一日曉月の近くにあり

一日	赤經	二三時 五分	赤緯南	六度四五分

海王星 獅子座四部にありて順行す

一日	赤經	九時二八分	赤緯北	一五度一〇分

弔詞

事の如何を問はず率先して業を創め之を成就するには明晰なる頭腦と深刻なる苦心を要す況んや天文學の如き高遠なる學術に於てをや寺尾先生は我國近代天文學の鼻祖にして夙に數理天文學を歐洲に學び深く究めて之を同學の子弟に授けたり我國の天文學實に之に依りて興る先生更に同志と共に我日本天文學會を創設し會務を統理すること十數年學術普及の機關始めて備り發達の基礎爰に成る先生の創業之によりて完し惟ふに先生の業績は我國天文學の進境に入ると共に益其光輝を發揚すべし

先生智德兼備推されて我日本天文學會長となるや幾百の會員仰ぎ奉ずること家長の如し今や先生を喪ふ哀愁の情想ふべし謹で弔す

大正十二年八月十五日

日本天文學會

弔詞

大正十二年八月六日東京帝國大學名譽教授理學博士寺尾壽先生薨ず先生は安政二年九月福岡縣筑紫郡住吉村に生る明治六年郷里を出でて上京し東京外國語學校に入り次いで開成學校に入り十一年優等の成績を以て同校物理科を卒業せらる翌十二年先生海外留學の命を受け佛國巴里に遊び碩學チスランに就きて天體力學を學びブークーに就きて楕圓函數論を修められリサンシエー、エス、シャンス、マテマチツクの學位を得て十六年三月歸朝せられたり其歸途先生は恩師チスラン先生に從ひ佛領マルチニク島に赴き金星の太陽面經過を觀測せられたり而して歸朝後先生は直ちに東京帝國大學教授に任ぜられ我國最初の星學講座を擔任せられたり

明治二十一年海軍省内務省及び大學の三天文臺を合して理科大學附屬東京天文臺となすや先生は即ちその最初の臺長に任ぜられ爾來臺務を主宰せらるゝこと三十三年其間皆既日蝕觀測のために仙臺黑磯枝幸印度等の各地に出張せられ殊に印度の日蝕觀測の如き黑死病の流行猖獗を極めたる際なりしにも拘らず之を敢行せられたり又本邦に於ける編曆事業並に報時組織は專ら先生の苦心によりて能く其の整頓を見ることを得たり先生は實に泰西天文學を組織的に我邦に移植せし最初の人なりとす其他先生は尚ほ測地學委員會委員長として日本天文學會に長として物理學校に長として教員檢定試驗委員として學術界並に教育界に貢獻せられたるところ尠からざるなり先生資性温良父母に孝に朋友に篤く又よく書生を愛せられたり先生の講義にはた座談に妙を得たるは人の能く知るところ學生を指導せらるゝこと亦懇切なりき而かも多年各方面の劇務を輟掌せられたる結果先生終に病に侵され事を見るに困難を覺えられたると一には後進に途を開かんとの意味に於て大正八年十月理科大學教授の任を辭せらるゝと共に東京天文臺長の職を退かれ悠々閑地に就きて靜養せらるゝことゝなれり吾人は其後先生の御健康の一時恢復に向はれたるを聞き國家のために之を祝せしも束の間にて宿痾終に如何ともすべからず今春來再び病床に起臥せらるゝに至りて終に再び起たず嗚呼悲哉

惟ふに先生の偉業は我國の天文學と共に長へに亡びず今や先生の計畫になる天文臺移轉の事畧其緒に就き又先生の宿志たる

官制改革の事も既に實現せられたり先生必ず安んじて地下に瞑せらるべし謹んで弔したてまつる

大正十二年八月十五日

東京天文臺長　平山信

履歷書（略）

理科大學教授　寺尾壽

福岡縣士族藩福岡藩

安政二年乙卯九月廿五日筑前國那珂郡春吉村ニ於テ生ル

明治六年十月　東京外國語學校ニ入リ佛語學修業

同七年九月　開成學校ニ入ル

同十一年十二月　東京大學理學部ニ於テ物理學科卒業

同十二年五月十七日　佛國ヘ留學

同十二年七月　「ロンスウリイ」天文臺ニ入リ星學實地見習

同十二年七月十日　東京大學總理ヨリ理學士ノ學位受領

同十二年十一年一日　巴里大學ニ入リ數學及星學修業

同十二年十二月　巴里天文臺ニ入リ實地星學修業

同十五年一月十二日　佛國文部卿ヨリ「リヨシエー、エス、マチマチツク」ノ學位受領（巴里大學）

同十五年十二月　金星經過觀察ノ爲メ佛國政府ヨリ「マルチニツク」島ヘ觀察委員巡遣ニ付願ニヨリ日本政府ノ手當ヲ受ケ右委員ニ隨行（文部省）

同十六年三月三日　米國ヲ經テ歸朝

同十六年三月廿四日　文部御省用掛被仰付攝津奏任候事（文部省）

同十六年三月廿四日　東京大學理學部勸務被仰付候事（文部省）

同十六年三月廿一日　理學部講師ノ任ヲ囑シ候事（東京大學）

同十六年十月十日　醫科總會之會員ニ撰擧候事（東京大學總理）

同十六年十月十六日　爲金環食觀測宮城縣ヘ出張申付候事（內務省）

同十六年十月廿四日　理學部醫科部會之會員ニ撰擧候事（東京大學總理）

同十七年一月八日　職務上都合ニヨリ本郷文部省用地內四番館ヘ住居候事（東京大學）

同十七年六月十九日　任東京大學教授（左大臣柔宣內閣書記官柔泰）

同十九年三月廿四日　本科予年線並計時法審査委員ヲ命ス（文部省）

同十九年四月十日　叙奏任官三等（內閣總理大學柔宣）

同廿年三月廿一日　皆既日食觀測地点檢ノ爲メ岩城國白河附近傍ヘ出張ヲ命ス（帝國大學）

明治廿年八月十九日　皆既日食觀測ノ爲メ下野國那須野ヘ出張ヲ命ス（帝國大學）

同廿年七月五日　萬國測地學會加盟會議委員ヲ命ス（文部省）

同廿一年六月二日　東京天文臺長ヲ命ス（帝國大學）

同廿一年閏月七日　明治廿年勅令第十三號學位令第三條ニ依リ茲ニ理學博士ノ學位ヲ授フ（文部省）

同廿二年三月九日　萬國測地協會委員ヲ命ス（文部省）

同廿二年八月十七日　佛國巴里府ニ於テ萬國測地學會職開設ニ付委員トシテ被差遣（內閣）

同年四月十三日　陞叙奏任官二等（文部省）

同年五月六日　明治廿四年曆原稿中五月廿四日ノ月食ヲ脫漏シタルニ心付カス發行スルニ至リタル段不都合ニ付謹俸年俸三拾六分ノ一ヲ科ス

同廿五年七月六日　叙正六位

同廿六年七月十一日　補理科大學附屬東京天文臺長（文部省）

同年同月同日　星學科第一講座擔任ヲ命ス（文部省）

同廿七年四月十八日　陞叙高等官四等

同年十二月十八日　船島縣下磐城平及白河ヘ出張ヲ命ズ（文部省）

同廿九年五月廿八日　陞叙高等官三等

同廿九年六月十日　皆既日食觀測ノ爲メ北海道北見國ヘ出張ヲ命ス（文部省）

同廿年十月廿五日　皆既日食觀測ノ爲メ印度國ヘ被派遣（內閣）

同廿一年五月廿三日　測地學委員會委員ヲ被仰付（內閣）

同廿八年六月十二日　帝國學士院會員

同四十二年八月十七日　測地學委員會委員長トシテ英國ヘ出張義序ヲ以テ天文臺設備ニ關スル事項ノ取調ヲ委囑ス但手當トシテ金四百圓ヲ給ス（帝國大學）

同四十三年三月廿五日　叙勳二等瑞寶章

同四十三年四月十八日　櫻井東京帝國大學理科大學長英伊兩國ヘ出張中學長代理ヲ命ス（東京帝國大學）

大正五年十二月廿八日　東京帝國大學評議員ヲ命ス（文部省）

同八年七月十日　依願免本官

同八年十月十九日　叙正三位　特旨ヲ以テ位一級被進（宮內省）

同九年二月六日　帝國大學令第十三條ニ依リ勅旨ヲ以テ帝國大學名譽教授ノ名稱ヲ授フ（內閣）

同九年六月廿八日　測地學委員會委員被仰付（內閣）

同九年十一月廿五日　學術研究會議委員被仰付（內閣）

同十一年五月十日　佛蘭西共和國政府ヨリ贈與シタル「コンマンドール、メリツト、アグリコル」勳章ヲ受領シ及ビ佩用スルコトヲ免許セラル（賞勳局）

同十二年八月六日　叙勳一等授瑞寶章

大正十二年八月六日　薨去（同）

故寺尾博士に就て

中村恭平

先日松隈編輯委員より、故寺尾博士の逸事なり、同博士に對する感想なり、何なりとも寄稿せよとの御注文がありました、小生は寺尾博士とは殆んど五十年の久しき間交際し、兄弟も啻ならざる間柄でありますから、既往を追想すれば可なり澤山の材料もありますが、餘白も尠かるべく、且つ詳細記述の暇もなきを以て、僅に小生の最も感じたる點の一班を略記して、其責を塞ぐことに致しました。

畏友寺尾博士の人物、性格、學歷、功績等は今更繰返す必要はなく、既に周知の事實でありますから贅言致しません、同博士の學才の非凡なりしこと、記憶力の强盛なりしことは勿論、多方面に亘りて多能多藝であり、殊に和漢の學に精通し居られたることは、驚歎の至りであります。昔、大學三學部に於て、學藝志林といふものを出版されました、是は當時唯一の學術雜誌でしたが、博士は漢籍の素養ありし故を以て、選ばれて其編輯に從事せられました。

博士が笈を負ふて東京に出でられ、外國語學校に入學せられたるは明治六年で十九歳の時と覺えます、而かも少年時代には、身體病弱でありしと云ふに拘らず、僅少の年月に和漢の學を能く修得せられたるは、凡人の企て及ばざる所と同窓連中と共に敬服致して居りました。

開成學校以來寄宿舍の同室に於て、數年間共同生活を爲しましたが、其間無邪氣に、種々議論も鬪はし、笑談も爲したるに、常に徹底したる意見を吐露され、殊に道理と感情とを、能く嚙み分けて、取捨按排することに於て、人に勝れて居られました。又「ノート」の整理、宿題の解決等は人並以上に敏捷で、糞勉强はせず、試驗前の泥細的勉强もせず、日曜や祝日に自習室に閉ち籠り「ノート」と首つ引きで問題の解釋に苦悶するが如きは素より之なく、試驗前とか宿題の有る時などは、殊更に寄席に行かうとか、散歩に出掛けやうとか、一杯飲みに行かうとか誘引せられたるもので、小生如き鈍物も、燒け糞となり其意に從ひ落第せんとしたることも往々ありました。此の外博士は相當隱し藝の所有者でもあり、碁、將棋は勿論、狂詩、狂歌、滑稽談、失策噺、俗謠等種々雜多の材料を豐富に貯へ、消燈後寢臺に入りてより、同室仲間に面白き談柄を提供せられ、深更に及びたることも頻繁でありました。又博士は隨分酒も飲み、詩吟もやれば、歌も歌ひ、劍舞もすると云ふ流儀で、何事にも堪能で、噺家の話にせよ、藝者の歌にせよ、一度耳にすれば直に覺え、能く記憶せられました、晩年謠曲を始められたるに、速に修得熟達せられましたも、宜なりと謂ふべきであります。

先年大學教授を辭し、伊豆の伊東に隱退せらるゝや、古今の珍書を蒐集するを樂みとし、南明倶樂部等に於て、古本の展覽會や即賣會のある毎に、態々上京して、一日でも二日でも詰め切り、搜索購入して、伊東に持ち歸られました、伊東の邸には、書庫も建設して夥多の珍書を貯藏せられ、日夜讀書の外餘念はありませんでした、近來は佛書を繙き僧侶を友として、一面には病苦を慰め、他の一面には大に悟りを開かれたと申します。

寺尾博士の如き、萬事に傑出せる多趣味の才物は稀に見る所にして、曾て同博士に對し、君の如き人にして、夙に法學に志し政治家になられ、天下國家の經營に任せられたならば、一層

國家社會に貢獻せられ、名聲も博せられたらんに、惜しきことなりしと語りたることもありました。

博士の身體は、生來頑强の方では無く、寧ろ蒲柳の質でありましたが、攝生に注意を拂ひ、この十年來は好きな喫煙も廢し、酒も節せられ、讀書謠曲等に閑日月を送られたるに、遂に難症の爲に立たれなくなりました、茲まで拙文を綴りました所、感慨實に無量、哀愁の情胸に迫り、禿筆が動かなくなりましたから筆を擱きます。

寺尾壽君は學才優秀の人

中村精男

寺尾君は外國語學校から東京大學三學部の佛の部三の組（第三級）へ入られたが間もなく一躍して一の組（第一級）へ編入せられ同學生を驚かした。夫れも其筈君は頭腦が非常に能く一を聞て十を知る程の英才で何を學んでも可ならざる所無く加之記憶力が又非常に强く一度聞きたる事は容易に忘れざりし。通常は餘り勉强せぬ人でもいざ試驗となると其間際には急に勉强を始め中には徹夜抔する者のあるは今も昔も同樣にて學生一般の習慣ともいふべきだが君は獨り其撰を異にし試驗の際は充分銳氣を養はざるべからずと稱し試驗の前晩には必ず試驗に關係無き他級の同學生を誘ひ牛肉店に登り飽食縱飲し頗る上機嫌に寄宿舍に歸り時を微吟し歌を低唱し且御國自慢や貝原益軒先生の逸事等を滔々と辯し夜半に至るを常とせり、試驗に關係無き學生は君の室に蝟集し面白く愉快に謹聽して夜の更けるを覺へざりしが獨り同級生は頗る困却せしならん頭痛鉢卷でノートと首引して徹夜迄せんとする際近隣で愉快そうな多人數の笑聲を聞くのは決して餘り愉快では無かりしならん。君は試驗當日も決して朝勉强等すること無く充分朝寢もし悠々と教場に出らるゝがそれで成績は何時も優等と來るのだから益々たまらぬ。當時佛の部の教師は皆佛國高等師範學校出の先生で日本人を佛人同樣に心得て居たから學科は可なり好く出來て居ても答案の文章が不味と大に點を引かれたものだ故に君の如く學科にも佛語にも優秀の者で無ければ決して優等生にはなれなかつた。君は試驗勉强はしなかつたが平生は所謂天才の如く懶惰で暮すことは出來なかつた。教師は一週間に少くも三四回は學生をボールドの前に呼出して時には隨分皮肉な質問をしたものだ而して當てられる者は概ね君であつた。教師の主張は斯うである。質問は被問者の學力を試すのが主眼ではない。此質問應答に依り講義の未だ盡さざりし所を補足し以て學生の學力を啓發するのだから優等を呼出すにあらざれば徒に時間を空費するのみにて學力啓發上何等の効果を生せずと。故に此選に當るものは學術佛語等に優秀ならざるべからず是れ君の特に屢々當てられたる所以で君も亦居常怠惰に過す能はざりし所以なり。

おもひで

平山信

寺尾先生のなくなられた思出に四十年前の東京大學の星學科の狀況を書いて見よう。その頃は東京大學の理學部の星學教室

舊天象臺之圖

が本郷の大學内只今の工學部の貯水池のやゝ西北部にあつて天象臺といつて居た。その前の東西の通路の北側に外國御雇教師の官舍が並んで建つて居り今の工學部の事務室や建築課や會計課の建物は其の昔の官舍を模樣更をしたものである。本郷の天象臺は誰の設計により出來たものであるか知らないが、米國でよく見る Student Observatory に酷似して居た點や、中に据え附けてあつた器械が凡べて米國製であつた點から見ると其頃の御雇教師ポールが造つたものではないかと想像される。二インチ半位の子午儀と六インチのアルバン、クラーク製の赤道儀其外に氣象器械があつて小さく整つて居た。其氣象臺で明治十五六年頃觀測に從事して居た方は、現今三井の元老團琢磨氏であつたことは寺尾先生在職二十五年祝賀會の席上で氏自身語られたことだ。御雇教師米人ポール（H.M.Paul）は明治十二年に來朝し十六年に歸國され、ワシントン天文臺員となり數年前に物故された。同氏の講義を全部きいたのは藤澤、田中館の兩博士及隈元有尙氏ならんか。先日山口鋭之助博士の話されたるにポールの講義を大學一年生のとききいたが中々面白かつた。主に Stellar Astronomy を講ぜられた。其試驗ときたら講義全部を答案に書かねばならぬ仕末だつたとの事である。寺尾先生御歸朝前の星學科の狀況はざつとこんなものであつた。先生はポール氏來朝の年に佛國留學を命ぜられ、ポール氏歸國の年に歸朝され、丁度入替りになつたのである。先生歸朝されるや理學部の一年學生に一般星學を講義された。その頃の理學部は卒業まで四年を要し理學部の一年生は今の高等學校の第三年に相當して居た。それで星學の講義は數學、物理學の學生は勿論動植物、地質などの諸學課の學生も必習の學課としてきかざるを得

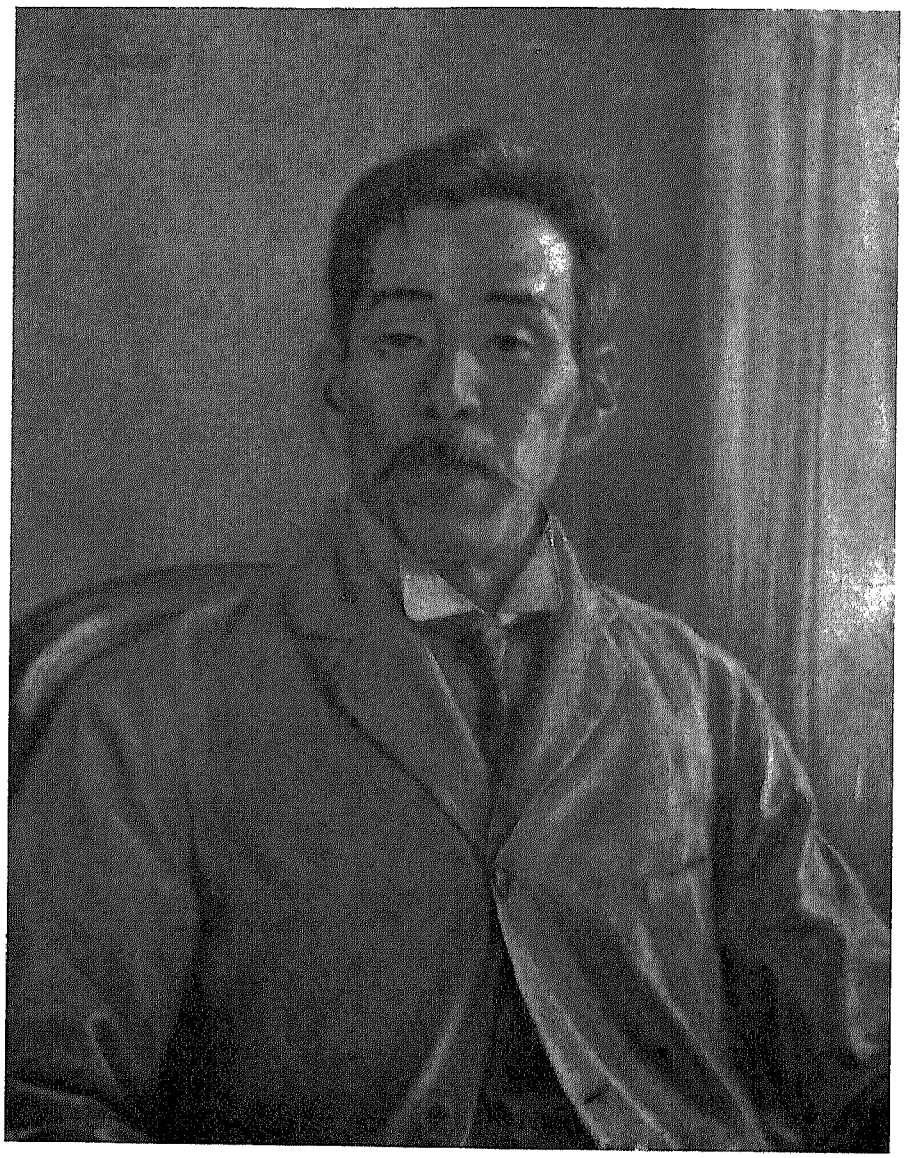
なかつた。先生は試驗後學生の答案を教場へ必ず持ち來られ「誰々のペーパーは如斯ことを書かれたるが、それには吾々少なからず恐縮したなど精細に批評されたるが、それには吾々少なからず恐縮したものであつた。先生は又數學科の學生に楕圓函數論を講義された。多分吾國に於いてシーター函數論を講義された始であらふ。

明治十八年に先生は始めて球面星學を講義され聽講者は蘆野敬三郎君、狩野享吉君及余の三人、次年は實地星學其翌年は天體力學を順次講義されたところは今の制度の如くであつた。田中館博士は助教授として實地觀測を指導され天象臺内の一室に住はれて居た。余は本郷の大學寄宿舍に居たが、觀測の都合上天象臺内の北端の小使部屋の隣の一室に數ケ月寄宿して居たので先生の御樣子をかなりよく見聞することができた。先生は大概の夜十二時過まで勉强された。觀測用の眼玉ランプに火を點じ天象臺の前の草原を通つて官舍へ歸られたので實によく勉强されるものと思つて居た。而して時には田中館博士との談話に全く時を費されることもあつた。先生は實に座談に妙を得られて居た。談話にして深更に及ぶ時は時計を視、座を立ち眼玉ランプに點火し歸途につかんとし何時の間にか元の席にもどり其を机上に置き尙繰返し時間の經過を忘れてしまはれたやうだつた。殊に談話に花の咲きしは故北尾次郎博士の夜中天象臺訪問の時で北尾先生は有名なるヘルムホルツ教授の實驗室に多年勉學され歸朝後東京大學に於いて講義をされて居て其頃先生の隣の官舍に住居して居られた。寺尾、北尾、田中館の三博士が鼎座してルベリエー、ヘルムホルツ、キルヒホッフ等の諸學者の評論をなしパリ天文臺やベルリン物理實驗室等について談論されるときは、それこそ龍攘虎搏の勢を示し何時となく椅子を離れ立上り狹い室内をゆきつもどりつされた。余は其時分學生として其談話されたる室の一隅に座し机上に書物をひろげ勉强をする樣をして談論に耳を傾け拜聽し居りし愉快さは生涯忘れんとして忘れ得ざる所、如何に先生等の談話が青年の血を沸かせしか、其狀彷彿として今尙目の前に見ゆるやうである。

先生は其頃頗る煙草を嗜み天象臺には刻煙草と長い煙管を備へて居られた。先生が談論を初められると、無意識に刻煙草を指にて粉末にする癖があつていざ吸はんとされるときには粉末になりしに氣付き部屋が乾燥すると云はれたこともあつた。又先生は紙卷煙草の吸口を細かにちぎつて捨てる癖があつた。先生の居られし近邊は机上と言はず床上と言はず殆んど眞白になつて居るので其の白さ加減で座にあつた時間が推測出來るといふ程であつた。而し先生は晩年絶對に禁煙された。それもこれも今は唯思ひ出の種となるのみである。

右は唯先生御歸朝當時のことを記したるのみ。省るに余は學生時代より先生の辭職せらるゝ迄三十有餘年間、相互旅行せし日をのぞきては殆んど一日として師事せざることなき境遇にあつた。而して余は未だ嘗て先生の怒れる顏色を見しことなく、又他人の惡行を語られしことを聞かない。學は和漢洋を兼ね精通せられしに拘らず、嘗て驕の色を現はされしことを知らず。教を請ふものあるときは懇に教へて倦まず。且親に仕へて孝、又親族故舊を厚く世話された。先生の隱退せられし伊東の別墅も、もとは老いたる母君の爲に選ばれしときいて居る。而して晩年健康の頓に衰へられたるも、母君の逝去以來だといふことである。

天文月報第十六卷第九號附錄　大正十二年九月十二日印刷納本
大正十二年九月十五日發行



壽尾

尙記したきことも數々胸に浮んで來ますが、以上を思出としてこゝに筆を止めます。

寺尾先生を憶ふ中の一小節

蘆野敬三郎

先生の學問に對する嗜好、博覽、强記、人格の大なる事適才を適所に置かれる事や、私人として人を世話された事、いくらでも話の種は盡きない。それ等は諸方面の人々から充分に話出される事と思ふから、我輩が今更喋々するまでもあるまいと思ふて差控へる。

唯一つ片鱗として記憶する一條を（知らぬ人が多いかと思ふから）お話する。一つは我輩が第一期の門生であつたといふ事に關係するかと思ふから尙更後の人々の參考になるかと思ふ。

先生が講義をされる前にアノ細かい佛蘭西式のノートをフールスカップに書いて居られる。ソレが下書から淸書になるまで通例三回の書直しをされて、まづ是でといふ事になつて教室へ持つて來られる。さて講義を始められると、彼處此處に若干の不滿を感ぜられて、ノートの通りに、朗讀講義をされない。それで決してノートを見ながらでなく、ドンナ長い算式でも暗記でズラ〳〵と書かれるが、つまりあゝでもないかうでもないと三回練り上げたノートもイザといふ時に、又ゾロ訂正されて、つまり講義の濟んだ後で更に改訂されるといふのが、其頃の常套であつた。如何に先生が講義の內容に苦心し洗練されたかといふ事は驚くべきもので、後學の爲に頗る有益な手本を殘された事と思ふ。お蔭で我々末輩も講義に際してノートを見ずに、又其內容を講義最中に改良するといふ一端を、眞似る樣になつた。

先生の殘された多數の遺訓の中で唯一つだけを記して多くの方々の有益な記事と重複しない程度に止めて置きます。不敏の門下生、芦野敬三郎謹識

○木村榮

私が寺尾先生に師事した最初の年は明治二十二年の秋からだつた。併し其頃は物理の學生達と一緒であつて時々麻布の天文臺へ往つたものの左程お親しみを得なかつたが追々年を經るに隨ひお親しみが增して來て三年生の時などは殆んど先生と云ふより父君だかと思ふ程に先生より可愛がつて頂きました。尤も年は十五ばかりしか違ひませんけれど其時分は三十位もお上の樣な氣がして居ましたので父上のやうな氣がして隨分氣儘を致しました。

私が大學在學中は始めの間今の平山信臺長が天文臺に居られましたが丁度外國留學生として四年間も外國に居られたものですから先生一人に生徒一人と云ふ工合でありました。夫故講義も丁度昔しの寺小屋式のものであつた爲め特にお親しくなつたものである。其上三年生の時は天文臺の學生宿所（元臺長官舍と中央に講堂を隔てて）に住んで居たものだからでもある。

先生の御講義は實に判り易く其上こちらの判る迄色々言ひ方や方法を變へてなされたから、學生に取つては實に仕合せだつた。先生は常にアラゴの講義振りの御咄をなさいましたが、そ

れは原理として多數の人に講義する場合尤も其中で判りにくそうな顏をして居るものが判つた樣にうなづく迄やるのである。此樣な御考は常に先生のは講義中一集にあつたものに相違ない。勿論失禮な御咄だが先生の頭腦の非凡なる爲めと、材料の豐富なる持主であつた爲め、學生が十分に先生の講義を理得し得たのであろうけれども、右のアラゴ式原理を御用ゐになつたから一層人に判り易くなされたのであらうと思ひます。又先生の頭腦の非凡なる事は著書でもよく判るが、又先生是迄能く御存じない事柄に就て他人の咄や講演を御聞きになつた時爲された御批評や御質問が一々皆適中して居た事でもよく判る。

先生は實に御人格の高い御心の寬大な御仁で、人の惡事を御存じでも決して御叱りなぞなしたる事もなく。又仕事に對しても決して干涉釜敷事もなされず、其人の自由に發展して行く樣になされた。併し此方より如何なる事でも敎へを乞へば懇ろに御諭示下さる御親切な御方であつた。一體先生は疾くより悟の道に入られた御方でした。

先生は非常に凝り性の御方で、趣味としても玉突、銃獵、謠曲等皆御熱中せられたので殆んど素人の一流になられてあつた。又先生は漢學が幼少の折から御堪能であられたが晩近佛敎の御研究を積ませられたよしを聞き馘に崇敬の念を深からしめた。

此折に先生より受けました多大の御恩誼を衷心感謝致します。又水澤の緯度觀測所の爲め先生には測地學委員會委員長として創立の時より非常に御世話になりました事をも厚く御禮申し上げて置きます。

（一三八）

寺尾先生の面影

平山清次

寺尾先生は、適當な時期に事業を起し、適當な手段によつてそれを成就された人である。東京天文臺でも、東京物理學校でも、又日本天文學會でも皆共通りにして出來たものである、先生は適當な時期を觀る事と、適當な手段を選ぶ事に妙を得て居られた。非常に明敏な頭腦と、一旦決意された事を必ず遂行する勇氣を持つて居られた事は明かである。

率先して事業を起すといふ事は、先生の壯年時代の大きな抱負であつたに相違ない。先生は時折其抱負の一端を私共に漏された。假令ば私が緯度變化の觀測をなし、傍ら乙項抔の研究に從事して居つた頃、先生は「先人の糊粕を嘗めるのは餘り好ましい事でない」と言はれた。又、日本天文學會が設立されて、天文月報を發刊する事になつた際、英語の標題を、どう極めやうかといふ相談が役員の間に起つた。種々談し合つた結果、Tenmon Gepo とか、Monthly Magazine of Astronomy とか、二三の案を立てゝ、會長となられた先生の所へ持つて行つた。私共の考は、先生が必ず其中からどれかを選ばるゝに相違ないといふのであつた。所が先生が言はるゝには「天文の雜誌は日本に始めてであるから何か先驅といふ樣な意味の名稱に仕度い。Herald といふのは慥かそんな意味の語だから、Astronomical Herald とでもしてはどうか」と。それで到頭天文月報は、Astronomical Herald になつた。こんな事は至つて瑣細な事の樣だが、如何に先生が、先驅とか先陣とかいふ事を重く見て居られたか、わかると思ふ。

思へば微分積分すらまだ能く知れ渡つて居なかつた明治の初年に、微分方程式や、楕圓函數や、天体力學を修められ、さうして教へられて、一舉して我日本の學問の程度を、歐米の程度にも劣らぬ迄に、高められた先生の意氣の壯であつた事は、今からでも明かに想ひやらるゝ。僅か十年足らずの短い間に、佛蘭西語は素より、人が最も六かしいと見て居た高等數學と理論天文學とを修了して、それを私共に教へられたのである。此樣な意氣の壯烈な人々があつたればこそ、日本の現代の文化が、旭日の如くに興つたのであると思へば、私共は心から先生の前に頭を垂れざるを得なくなる。

先生自身、古人の糟粕を嘗める事を快しとせられなかつたので、私達が先生の驥尾に附して跡を追ふて行く事を先生は餘り喜ばれない樣であつた。勿論、創業者許りで後繼者が無くては仕事が一代限り斷絶する理だから、遺業を繼ぐといふ事は望まるゝ事であつたに相違ない。然し創業者が始めた仕事を、二代目三代目の後繼者が、改良も進歩も計らずに、其儘引繼ぐ樣なら寧ろ繼承しない方が良いといふ樣な考を持つて居られた事は明かである。

先生の理智に優れて居られた事は言ふ迄も無いが、決してそれ丈では無い、藝術にも宗教にも哲學にも深い理解を持つて居られた。先生は、萬事を機械的に考へる唯物論者ではなかつた。或時、加藤弘之博士を評して「加藤さんは唯物論を主張しながら、行爲の自由と責任とを認める。唯物論が若し眞ならば、人間の行爲は天体の運動の如く善でも惡でも無い、惑星が楕圓軌道を畫くのも、彗星が拋物線軌道を畫くのも、原始的に定まつて居る事で、それには自由も責任も無い」と言はれた。先生は思想に於ても、行爲に於ても自由と責任とを最も强く感じて居られた人である。唯物論者でなかつた事は勿論である。

寺尾先生を憶ふ

理學博士　國枝元治

嗚呼寺尾先生は遂に逝かれました。

忘れも致しません、今より二年半程前即ち大正十年の四月のことでありました、先生が本郷の大學病院に入院手術を受けられたる由傳聞し、或日早速御見舞に參りました、實は近年公私多忙にて天文臺にも久しく行かず、又東京物理學校には毎週一回出て居ましたが時間割の都合で舊維持員の方や幹事の方に遇ふ機會が少なかつたので寺尾先生の入院を知つたのは大分時日を經た時でありまして、御見舞に參つた時は手術後十數日を經過して居ましたが、まだ御病室の入口には面會謝絶の札が揭げてありましたために、御目にかゝることが出來ませんでした。併し奥樣より御經過の大ひに良好なるを聞き多少愁眉を開いたものゝ、御談の中に「病人には胃潰瘍と云ふことにしてあるが實は幽門附近の胃癌らしく、胃壁の他の處に腸をつけかへたので、手術をしなければ三四ヶ月も六ケしからんが此の手術によりて或は半年とか都合良くて一年位生命を延ばすに過ぎないのでしよう」と仰せられたるには何とも適當なる御慰めの言葉も思ひ浮ばず、近日面會謝絶の解除さる頃の再訪を約し暗然として病院を出たのでありました。然るに其後間もなくして全く意外に速く御退院の御通知に接し、御經過の良好なりしを大ひに

喜んだのでありました。夫から屢々傳聞したる處によれば御健康は御手術前よりも却つて良い位であるとのことでしたから蔭ながら心嬉しく先生の長壽を祈つて居りましたところ今春來又々御病狀の面白からざる由傳へられ懸念に堪えませんでしたが遂に去八月六日伊東の御住居に於てはかなくも此の世を去られたのであります、實に痛恨の情に堪えません。玆に此の追憶を記するに當り萬感交々起り遲々として筆の進むを覺えません。

先生は實に高潔にして學者らしい方でありました而して頭腦の明晰なること先生の如きは世間稀に見る處でありました。又後進に對し極めて懇切でありまして一度先生の教を受けたる者は其の温情を深感せざる者はありませんでした。

余が初めて先生の謦咳に接することを得たるは明治二十八年九月帝國大學理科大學に入學したるときでありましたが、實は先生の名聲を聞き敬慕の念を起したるは夫よりも餘程以前のことでありまして、先生の有名なる著書なる算術教科書を通してでありました。此の書の上卷の發行せらるゝや其の好評を聞き直ちに一本を購ひ、通讀嘆賞措かず、下卷の出づるを一日千秋と待つた位でありました。大學に入學して親しく先生の御授業を受くるを得るに至りてからは其の三年の課程を終る迄終始御講義の立派なるに感服致し居りました。特に敬服に堪えなかつたことは如何なる講義でも其のすぐ前に當り數十分乃至數時間の時間をさかれ十分に準備をなされたことであります。先生が或時の坐談に於て巴里に御留學中の事を談されたる序に某教授は講義をなす前に當り必ず十分の下調べをなす習慣であつた爲め其の講義は立派に整頓されて居たが中々此の眞似は他人には出來難いことであると言はれましたが、先生は此の他人の出來難きことを實行されて居られましたのであります、此の點は余等後進の大ひに鑑むべき處と深く肝銘して居るのであります。

次に大學卒業後公務上先生に接するの機會を得て居ましたのは文部省教員檢定試驗の臨時委員としてであります。之は隨分長いことでありまして明治三十四、五年頃から大正八年先生が一切の公職をやめらるゝ前年まででありまして此の長き間毎年先生を數學科の委員長と仰ぎ其の指導の下に試驗の仕事をして來たのであります。此の間試驗問題會議の際各委員の持寄りたる問題を一々點檢されて其の要點を指摘さるゝことの迅速なるのと、問題選定に當り他人の氣付かざる微細の點にまで注意せられて居らるゝのとを見てイツモ先生の明晰なる頭腦と周到なる用意とには敬服せざるを得なかつたものであります。

先生は又實に談話好でありました、數人のものが先生の處に集まれば其處に坐談の花の咲かぬことはないのでありました。たとへ夫が試驗問題選定會議であろうとも、天文學譯語會であろうとも、又夫が天文學會創立に關する會議であろうとも、何時でも先生の居らるゝ處にては談笑歡語時の移るを忘るゝ程でありました。困難なる問題や眞面目なる議論にて多數のものゝ頭が疲勞を覺え初むる頃になれば何時の間にか先生を中心として面白き雜談が湧くのでありました。此が恰かも一服の清凉劑を投じたる如き役目をなすかの如く談笑の間に於て當面の仕事を片付けて行くに妙を得て居られました。

余は大學を卒業してからは直ちに東京高等師範學校に職を奉ずる事になり引續き今日に至つて居りますので、其後先生に接近する機會は少なかつたのであります。從て天文臺に於ける先生又御家庭に於ける先生の事はよくは知らず、唯先生の公的生

活の一部分よりしか知りませんのですが、明治廿九年八月皆既日食觀測の爲め先生が北海道北見國枝幸に出張の際大學の學生として隨行を命ぜられ約四十日間先生と寢食を共にするの幸榮を得、其間遺憾なく先生の高風に親炙するを得ましたから玆に少しく當時の事を記し先生を紀念することに致しませう。

此の年七月十日には豫て米國の Brashear に注文し置きたる八吋の天體寫眞儀が横濱に來着の豫定なりしが着否判明せず先生大ひに焦慮せられ二回迄も使を横濱に派遣せられ夕方に至り荷物到着の電報に接し一先づ安心せられました。其の翌十一日には昨日横濱着の天体寫眞儀正午に至るも新橋驛に來着せず、先生又々心配せられ、自分は是迄日食觀測には不運なりし故今回も亦曇天にて目的を達し得ざるべしとか又米國より來着の器機も多分破損し居りて用をなさゞるべしなど言はれたるが午後五時半に至り荷物は無事天文臺に到着し一同勇み立ちて明日出發の準備を爲しました。明くれば十二日朝一番汽車にて上野驛を出發しました。今回の觀測地なる枝幸には只今は故人となりたる松崎故一郎氏先發し觀測地點の選定等準備に從事し居られたる故此の日先生に隨行したるは故水原準三郎氏樺正董氏學生にては余一人、外に職工と小使とが一人宛加はり、一行合せて先生ともにて六名でありました。余等枝幸に着したる後に於て中野德郎氏熊本より來り加はられたのであります。一行上野驛出發後は仙臺青森室蘭等に一泊して十五日夕方小樽に着き、此處にて便船を待ち十六日朝北海道丸と云ふ小汽船に乘船、十八日の朝無事に目的地たる枝幸に到着しました。此の間先生は汽車汽船の乘降の度毎に携帶の天体寫眞儀の揚下しに絶大の注意を拂はれ、此の器械を無事に觀測地に持ち行くことの外には何事も先生は考へて居られない樣に見受けられたのであります。

偖枝幸に於ける先生一行の宿處は此の地の漁業家廣谷某氏の家であつて觀測所は町外の原野中に選定しあり、宿處よりは七八町の距離にありました。而して此の町内には米國よりトッド氏一行、佛國よりはデランドル氏一行の觀測隊が來着し居り、觀測の準備中でありました。

十八日よりは八月九日の日食當日に至るまで連日觀測の準備に多忙を極めました。しかも此の間曇天多く、晴間太陽の觀測も思ふ樣に出來ず、僅かの時間を見て漸く仕事を進むることを得たので、夜の十時十一時頃に至り空の晴れたるを見ては先生に引率せられ觀測所に行きたることも數回あり、或時の如きは夜の十二時頃より出かけて東天の白むまで觀測に從事した事もあつたのであります。先生は松崎氏を助手として八吋の寫眞儀を使用し、水原氏は他の望遠鏡にて皆既食の寫眞を撮る事に定まり、余は平素は時と緯度との測定をなし、日食當時には水原氏の助手を勤むることを命ぜられ、又樺氏は一つの寫眞器を携へて宗谷に至る事を命ぜられました。樺氏の宗谷行は臨時に定められたので、之は當地に來着してより曇天多き故當日のことを懸念せられ、器械の不完全を顧みず觀測地點を尙一ヶ處增設せられたのであります。斯の如く周到なる注意を以て準備に遺洩なきを期せられたが、愈八月九日の當日には朝より天候面白からず遂に雲を透して念ばらしに皆既食の寫眞を撮つたものゝ結局は用をなさなかつたのであります。而して支隊として宗谷に行かれたる樺氏よりも曇天不成功の電報に接し、東京出發の前日に於ける先生の言が徒に箴を爲して先生は勿論一行の者の落膽一方でなかつたのであります。之より引上げの準備やら

又便船を待つ等にて尙數日間滯在して居ましたが其の間に次の樣な事がありました。夫は八月十一日の事でありました。其頃新築落成したる此地としては宏大なる小學校（當時枝幸町第一の建物）の開校式が催され、日食觀測隊の者も招待せられたのであります。其の後砂金の產地として大ひに繁昌したる枝幸町でありますが、當時はまだ遙遠の一漁場に過ぎなかつたので、其の小學校の開校式に遠來の珍客たる天文學者等の臨席を得るのは學校として大なる榮譽とした樣でありました。當日水原松崎兩氏差支ありし故一行中よりは先生と余とが出席しました。極めて盛大なる開校式であつて幾多の祝辭の後で、トッド及デランドル兩氏の演說もあり、トッド氏の演說は大島某氏通譯せられて、デランドル氏のは先生が通譯せられたのであります、而して先生は何等の演說も爲されなかつたのであります。恰もデランドル氏の通譯として出席されたかの如くに見えまして、當時白面の書生たりし余は何となく物足なく感じましたが、其後聞く所によれば演說は全然斷はられ實際デランドル氏の通譯を引受けて出席されたのだそうでありまして、玆に亦先生の特色を現はされたる處がある樣に思はれ却て奧ゆかしく感ずるに至りました。此の後別に記すべき事もなく十一日便船を得て出發し、歸京の途につきました。

先生の事につきては尙記すべき事が幾多ある樣でありますが餘り長くなりますから是位に致しませう。尙天文學者としての業績につきては他に適當な方から傳へらるゝことゝ思ひますから夫には言及せざることに致します。

只最後に一言附記して置きたきは我國數學教育界の一大功勞者としてのことであります、先生の著書中前にも述べました算術教科書は無比の良書との定評あり又晩年藤野丁祐氏と共著にて發行せられたる「算術講義」の如きは多年を費されたる苦心の著述でありまして邦文の數學書中稀有の良書と云ふべきであります、又吉田好九郎氏と共に中等學校用の數學教科書を編纂せられ廣く世に良教科書を供給せられたるは我邦數學教育上著大なる貢獻をされたものと云ふべきであります。且又同志の者と共に東京物理學校を創立し我國の理科教育に盡されたる効蹟の偉大なることは世人の良く知る所であり、玆に喋々を要せざる事でありませう。

嗚呼先生は遂に逝かれました。先生の逝かれたるは我國天文學の先覺者として惜みても尙餘あるのみならず、數學教育會の元老として亦極めて痛恨事であります。

（大正十二年八月二十二日誕で此の追憶を記す）

寺尾先生に就て古き思出の一節

理學士　中野德郎

嗚呼寺尾先生逝けり。先生の學識と才能に就ては既に定評あり。其論及には別に其人あらん。今此に先生が天眞爛熳の資質を具へられ、而して其門下生を視ること慈父の愛兒に於けるが如き溫情を有せられし一例を思出として記述することゝせん。

余大學に於て三年先生の教を受け、之を終へて直ちに當時創設の水澤緯度觀測所に就職せしが幾程もなく、所長木村氏外國出張不在となり、當時尙不馴の余は心細くも單獨所務を擔當し居たりしが寺尾先生は測地學委員會委員長の資格を以て、

冬期雪深き水澤に出張、懇切に余を慰撫激勵せられたるは、今も尙其温情を忘れざるところなり。其日天候惡敗其夜の觀測到底不可能と認めしかば、官舍に於て粗酒一献捧げ度き由を申出しところ、先生は舊門弟の微意を納れられたるものか、立どころに快諾せられぬ。然るに其際懸念せしは、先生は酒豪にて然かも酒の上頗る賑かなるを常とするに、余や一滴の酒も呑めず、酒を勸め酒席の座興を添ふること全然不能にして、其夜先生を遇する自信聊かもなかりしにありき。此不安裡に兎も角心許りの酒肴を整へ先生を待ちしに、先生刻を違へず、積雪を侵して來宅せられ、而して余の不安とせる酒席に於ける余の話せぬを承知の先生は「今夜は折角の御馳走なるゆへ自分丈け充分に飲む主人は飯でも喰ふべし」とて余には頓着なく滿を引いて快飲、陶然として醉はれ、例の輕快なる調子にて奇論快談風發家人の顎を解き、果は其頃始められたる謠（當時は餘り上手と思はれざりき）、詩吟、俗謠等交々進られ、主人たる余は、先生の獨占坐興に笑ひ崩るゝ外、何等坐興の努力の必要なく。斯くて先生は心置なく獨りにて三時間近く打興せられ、左も愉快相に歸宿せられたり。先生の天眞爛熳人の微意を快く納めらるゝを常とせられしこと右の例にて知らる。同樣の例は明治四十二年余が先生の御供して歐州諸都を巡遊せる時にも屢々發露するを見たり。即ち先生の敎を受けし留學生等各地に在り先生の到來せらるゝを聽くや、競て先生の爲め東道の主人たらんとするもの多かりしが。先生は己れの子女の志を喜ぶの情を以て衷心喜んで其好意を受けられ、事情の許す限り其爲すところに任せられ。斯くして舊門下生の發展を己の事の如く喜ばれたり。而して其情誼は舊門下生に對しては總て一視同仁に見受けられたり。斯くて苟くも一度先生の敎を受けし者の先生に對する情誼は恰も子の親に對するが如く濃厚なりしは宜なりと云ふ可し。

雜報

◎寺尾博士葬儀　既報の如く八月十五日午後四時、芝公園增上寺に於て佛式を以て執行せらる、會葬するもの朝野の名士、帝大、文部省、關係者及天文臺員、天文學會々員、東京物理學校職員、生徒、及同校同窓會員等にして何れも恩師の靈前に捧ぐる涙と共に日の暮るゝ頃無事式を了つた。

◎關東地方大震災　大正十二年九月一日午前十一時五十八分半關東地方に大地震あり、續いて火災を起し類燒したる都市、町村甚だ多し。東京天文臺も此地震の爲め少からざる損害を被りたるも、原器時辰儀のみは幸ひにして聊かの損傷なく差當り報時の事務を開始することを得たるも、尙電信線路の復舊せざる個所ある爲め、横濱（破損、燒失）神戸、門司の報時球による報時の回復せざるを遺憾とす、會員諸子の中にも此震災に罹られたる方多數あるべき見込。詳細は追て記述すべし。

編輯者より

本號は寺尾先生追悼の爲め編輯せしものにして、寺尾先生の御肖像（黑田清輝氏筆油繪）を三色版として添へたり。又田中館、早乙女兩博士御洋行中の爲め御執筆を願ふを得ざりしは遺憾に堪へざるところなり。

十月の天象

星座（午後八時東京天文臺子午線通過）

一日	白鳥	水瓶
一六日	ペガスス	水瓶
	山羊	南ノ魚

太陽

	一日	一六日
赤經	一二時二〇分	一三時二〇分
赤緯	南二度四五分	南八度二八分
視半徑	一六分〇秒	一六分四秒
南中	一一時三一分一	一一時二六分九
同高度	五一度三六分	四五度五三分
出	五時三五分	五時四七分
入	五時二七分	五時六分
出入方位	南一度八	南九度八

月

	日	時刻	視半徑
下弦	三日	午前二時二九分	一五分八秒
朔	一〇日	午後三時六分	一六分三八秒
上弦	一七日	午前五時五四分	一五分四四秒
望	二五日	午前三時二六分	一四分四三秒
最近距離	一一日	午後〇時七	一六分四〇秒
最遠距離	二六日	午前一一時六	一四分四二秒

流星群

十月は流星出現數稍多く、中旬にはオリオン座流星群稍著しかるべく、下旬には往々光度強き流星を見る事あり。十月の主なる輻射点次の如し。

	赤經	赤緯	附近の星	性質
八日……	五時〇八分	北三一度	牡牛座β	緩
一五日頃	二時〇四分	北九度	牡羊座南部	緩
一六—二五日	六時〇八分	北一五度	オリオン座g	速、疾
二〇—二四日	六時三二分	北一四度	双子座δ	速、疾
二八日頃	二時五六分	北五度	鯨座ο	緩
三一日……	二時五二分	北三三度	牡羊座第四一星	緩、疾

變光星

變光星		範圍	週期		極大又は極小中標天文時（十月）				種類
			d	h	d	h	d	h	
030140	β Per.	2.3—3.5	2	20.8	小 19	14,			A
035512	η Tau	3.8—4.2	3	22.0	小 4	4,			A
062230	RT Aur	5.0—5.9	3	17.5	大 1	13,	16	11	C
171101	U Oph	6.0—6.8	1	16.2	小 3	12,	20	7	A
171333	η Her	4.8—5.3	2	1.2	小 1	20,	16	5	L
184633	β Lyr	3.4—4.1	12	21.8	小 4	4,	17	2	L
194700	δ Aql	3.7—4.3	7	4.2	大 4	15,	18	23	C
195116	S S δ o	5.4—6.1	8	9.2	大 8	18,	25	12	S
222557	ζ Cep	3.6—4.3	5	8.8	大 2	17,	18	19	C

種類　A……アルゴール種　C……ケフエウス座δ種
L……琴座β種　S……短週期

潛入及出現の變光星

十月	星名		等級	潛入 中標天文時	潛入 方向	出現 中標天文時	出現 方向	月齢
日				h m		h m		
1	115	Tau	5.3	14 7		15 22		20.9
4	2	BCnc	6.0	—		12 9		23.8
4	5	Cnc	5.9	12 18		13 26		23.9
25	85	Cet.	6.3	11 32		13 7		15.4
30	74	B Gem	6.2	—		10 46		21.3

方向は頂点より時計の針と反對の方向に算す

明治四十一年三月三十日第三種郵便物認可
（毎月一回十五日發行）
大正十二年九月十二日印刷納本
大正十二年九月十五日發行

（定價貳拾錢 郵金貳錢）
東京市麻布區飯倉町三丁目十七番地
東京天文臺構內
編輯兼發行人　木田親二
東京市麻布區飯倉町三丁目十七番地
東京天文臺構內
發行所　日本天文學會
（振替貯金口座二三五番）

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　島連太郎
東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍

賣捌所
東京市神田區通神保町　東京堂
東京市神田區淡路町　東京書店
東京市神田區南神保町　東京堂
東京市京橋區元數寄屋町三丁目　岩波書店